

ぬうすもの、かたびらのひまより、みいれたまへるに、ひとまばかりへだてたるみわたしに、かくおぼえなきひかりの打ほのめくを、おかしとみ給ふ程もなくまぎらはしてかくしつ、されどほのかなるひかり、えんなること、のつまにもしつべく見ゆ、ほのかなれど、そびやかにふし給へりつるやうだいのおかしかりつるを、あかずおぼしてげにあのごと御心にしみにけり、

なく聲も聞えぬ虫の思ひだに人のけつにはきゆる物かは、思ひしり給ぬやと聞え給ふ、○下略

〔枕草子〕夏はよる月のころはさらなり、やみもなほほたるおほくとびちがひたる、又たゞ一二などほのかにうちひかりてゆくも、いとおかし、

〔古今著聞集和歌五〕和泉式部おとこのかれぐに成ける比、貴布禰に詣でたるに、ほたるのとぶを見て、

ものおもへば澤のほたるも我身よりあくがれいづる玉かとぞみる、とよめりければ、御社の内に忍たる御聲にて、

おく山にたぎりておつる瀧津瀬の玉ちるばかりものなおもひそ、其しるしありけるとぞ、

〔宇治拾遺物語十二〕いまはむかし、あづまうどのうたいみじうこのみよみけるが、ほたるを見て、

あなてりやむしのしや尻に火のつきてこ人玉ともみえわたるぞ、

あづま人のやうによまんとて、實はつらゆきがよみたりけるとぞ、

〔今物語〕ある殿上人、ふるき宮ばらへ、夜ふくる程に参りて、北のたいのめむだうにた、すみけるに、局におる、人の氣色あまたしければ、ひきかくれてのぞきけるに、御局のやり、水に、螢のおほくすだきけるを見て、さきにたちたる女房の、螢火みだれとびてと、うちながめたるに、つぎなる人、夕殿に螢とんでとくちすさむしりにたちたる人、かくれぬものは夏むしの、とはなやかにひとりごちたり、とりぐにやさしくもおもしろくて、此男何となくふしなからんもほいなくて、